

混合歯咬合における歯科矯正学的管理

神奈川歯科大学 鈴木祥井

乳歯の正しい管理が重要なことは論をまたない。この研究班に歯科が加わったのも、顎顔面頭蓋の正常な成長発育の追究とともに、それを阻害するおそれのある種々の障害排除が、目的としてあったためである。

ヒトの成熟度を示す生理的年齢の1つに“歯齡(dental age)”がある。山下家の子供達にも永久歯が萌出し始め、Hellmanによる咬合発育段階IICに到達した。これから第2大臼歯が萌出(IIIC)するまでの5～6年間に、口腔内は劇的に変化する。その間の咬合の育成の適否は、将来の咀嚼機能、外観などを大きく左右する。すなわち、生理的に脱落するまで乳臼歯を健全に保存しておくことが、歯を介して発育に必要な刺激を顎骨に与えることになるし、逆に、齲蝕による食物摂取、咀嚼などの障害は、顎発育のみならず、栄養不良による全身発育の低下をも招き易い。また、歯は萌出後1～2年が最も齲蝕にかかり易いが、それ以後は齲蝕感受性が低下するといわれ、この短い期間の歯の管理が重要となる。さらに、歯の交代のわずかな錯誤が永久歯期の不正咬合をひき起こすこともある。

このような観点から、神奈川歯科矯正学教室では、顎顔面頭蓋、とくに歯列の発育を中心に観察を続ける一方、齲蝕発生1つの因子である口腔清掃不良が生じないように徹底した刷掃指導をおこない、乳臼歯および新たに萌出てきた永久歯へのフッ化物塗布および裂溝閉そくをおこなっている。

1) 刷掃指導

従来山下家では、母親がかなり丹念に子供達の口腔内の管理をおこなっていたようである。その結果、学齢期に達するまで、5人とも1本の齲蝕も存在しないという驚くべき状態を維持している。これは、最近減少傾向にあるとはいえ、乳歯の齲蝕罹患率が50%を超えている日本の現状からみて、極めて稀有な例といえる。しかし、小学校へ入学し始めると母親の監視下にある時間が減少し、とくに昼食後の刷掃に不安が残る。そこで、刷掃の習慣づけと技術の習熟を目的として、各々に1人ずつ歯科衛生士を配し、指導をおこなった。口腔内の汚れ具合は、図に示すような記録表に記入し、次回との比較によって指導の目安となるようにした。

汚れは顕示薬を用いて確認させ、刷掃に工夫を加えた。最後にフッ化物の塗布をおこなった。歯ブラシおよび歯間清掃用のフロス・シルクは、次回検診まで使えるような充分な量を与えた。

2) 裂溝閉そく

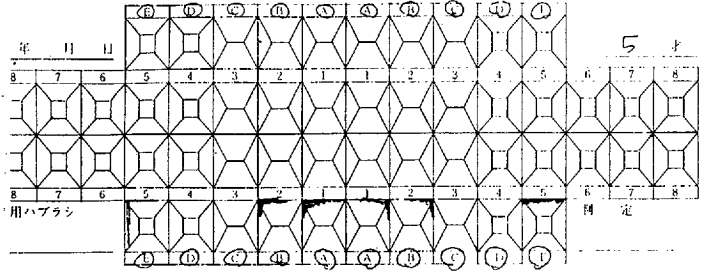
ヒトの歯で最も齲蝕になり易い部位は、構造上、複雑に走行し食物が貯留する“溝”である。以前はこの部位に、予防充填と称して、あらかじめアマルガムを填そくすることがおこなわれた。最近では歯科の分野でも高分子化学の研究が進み、歯質とよく接着し、一部化学結合も期待できる充填材が開発された。そして歯面の小窩裂溝にもこれが応用され、齲蝕予防に一役買えるようになった。そこで、5人の子供達の乳臼歯と第1大臼歯にこれを適用し、齲蝕発生を阻止しようとした。

対象となる歯の咬合面を充分に清掃し、簡易防湿下で部分的に脱灰させ、水洗乾燥後 fissure sealant を塗布した。以後は定期的にチェックし、脱落があれば追加填そくする予定である。

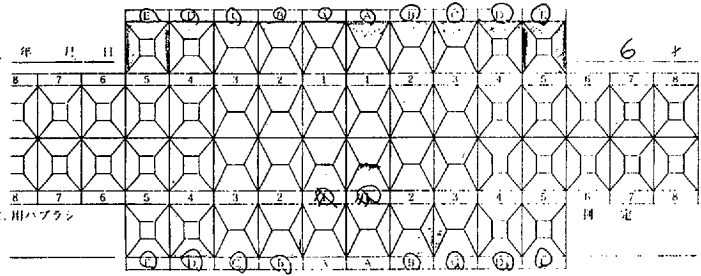
なお、もう一カ所清掃しにくい部位(先天的不潔域)である隣接面に対しては、前述のフロス・シルクによる物理的清掃と、フッ化物塗布による化学的予防しか対処する手だてはない。

子供達は、現在、第1大臼歯の萌出、あるいは前歯の永久歯への交代が進行中であり、2～3年のうちには、最も歯科矯正学的にも重大な関心事である側方歯の交代が始まる。したがって、今後とも充分な監視と適切な処置をおこなって顎発育に対する環境の影響、およびそれらの不正咬合との関連などの解明を推進したい。

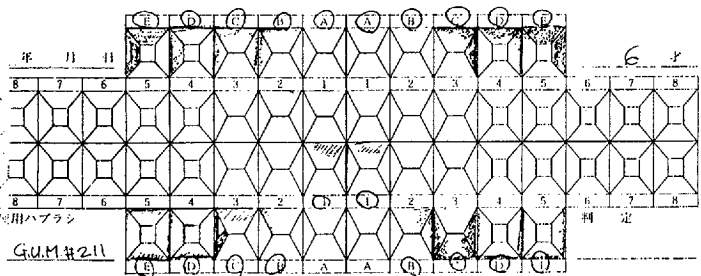
Dr



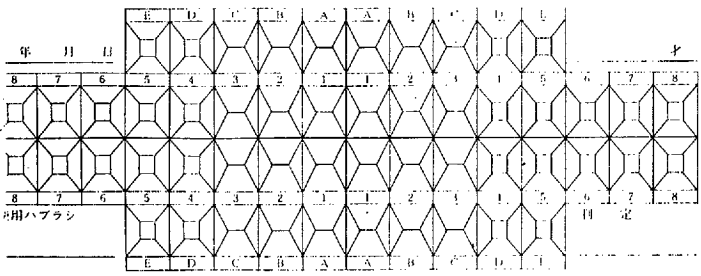
O·H·I = + = P·M·A =



O·H·I = + = P·M·A =



O·H·I = + = P·M·A =



O·H·I = + = P·M·A =

NOTE

★下顎 E Eの遠心部と下顎前歯 BA BA 舌側に少し汚れあり。
★スクラップ法を教える。1日3回(おやつを入れると4回)磨くことを約束。
フロス(サークル法) Buashing and フロスよくできる。 D・H 鈴木

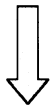
NOTE

前日に教えた磨き方をほとんど忘れてしまった様なので、もう一度初めから教えた。上顎の頬側が汚れていた。I Iが少し崩れ出していたのでフローテ塗布。フロスは家ではやっていない様です。
※下顎を出すくせがある。 D・H 鈴木

NOTE

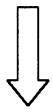
今回は、磨き方は覚えていたようですが、どうしてもうまく磨けない様です。上顎の臼歯部頬側が一番汚れがひどいので本人に鏡を見せて自覚してもらった。 D・H 鈴木

NOTE



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



乳歯の正しい管理が重要なことは論をまたない。この研究班に歯科が加わったのも、顎顔面頭蓋の正常な成長発育の追究とともに、それを阻害するおそれのある種々の障害排除が、目的としてあったためである。

ヒトの成熟度を示す生理的年齢の1つに“歯齡(dental age)”がある。山下家の子供達にも永久歯が萌出し始め、Hellmanによる咬合発育段階IICに到達した。これから第2大臼歯が萌出(IIIC)するまでの5~6年間に、口腔内は劇的に変化する。その間の咬合の育成の適否は、将来の咀嚼機能、外観などを大きく左右する。すなわち、生理的に脱落するまで乳臼歯を健全に保存しておくことが、歯を介して発育に必要な刺激を顎骨に与えることになるし、逆に、齲蝕による食物摂取、咀嚼などの障害は、顎発育のみならず、栄養不良による全身発育の低下をも招き易い。また、歯は萌出後1~2年が最も齲蝕にかかり易いが、それ以後は齲蝕感受性が低下するといわれ、この短い期間の歯の管理が重要となる。さらに、歯の交代のわずかな錯誤が永久歯期の不正咬合をひき起こすこともある。

このような観点から、神奈川歯科矯正学教室では、顎顔面頭蓋、とくに歯列の発育を中心に観察を続ける一方、齲蝕発生の1つの因子である口腔清掃不良が生じないように徹底した刷掃指導をおこない、乳臼歯および新たに萌出してきた永久歯へのフッ化物塗布および裂溝閉そくをもおこなっている。